

朝鮮人「満洲」移民の移住動態と「安全農村」

朴 仁哲

要旨

朝鮮人の「満洲」への移住と定住の歴史には日本の朝鮮・「満洲」支配が深く関わっている。しかし、かつて日本の植民地時代に中国東北地域に朝鮮人が移住したという「歴史的事実」については、一部の研究者を除けばほとんど知られていないといつてよかろう。「安全農村」(以下、括弧略)とは、朝鮮総督府が「満洲事変」(「九一八事変」)の後、在満朝鮮人を保護するという名目で「満洲国」に建設した農場である。安全農村が建設された地域は、無主地ではなかった。安全農村は、中国人農民を追い出し、朝鮮人を移住させて建設された。また、安全農村には在満朝鮮人だけではなく、朝鮮半島から、特に南部朝鮮地域からの朝鮮人を多く収容した。安全農村の建設によって、帝国日本は、いわば一石三鳥の利を得た。つまり、朝鮮総督府は、過剰人口を「満洲国」に送り出すことができた。「満洲国」を支配した関東軍は、在満朝鮮人の管理が容易になった。日本政府は、朝鮮人の内地流入を軽減することができた。本稿は、朝鮮人「満洲」移民の移住動態と関連づけて安全農村を考察し、為政者が強調する安全農村の建設目的は、在満朝鮮人の保護であることに、アンチテーゼを提起する。

I 朝鮮人の「満洲」への移住過程

朝鮮人が「満洲」へ移住しはじめたのは、明の時代の末期から清の時代の初めにかけてである。朝鮮人が大量に「満洲」へ移住したのは、19世紀後半になってからであると一般にいわれている¹⁾。朝鮮人は、3つの段階を経て「満洲」へ移住した。第1段階(1860～1910年)の前まで、中国の清朝は、「満洲」に対して封禁政策をとり、豆満江(中国の図們江)と鴨緑江の北岸に住むことを禁じていた。しかし、1860年から70年に、北部朝鮮で長期にわたる自然災害が発生し、多くの避難民が、清朝の封禁政策を侵して鴨緑江や豆満江を渡り、またはシベリアを経由して「満洲」へ移住した。

第2段階(1910～31年)には、日本が朝鮮半島を併合した1910年前後から

「満洲」へ移住する朝鮮人が急増した。特に「三・一運動」²⁾を機に、帝国日本の植民地統治に反抗し、多くの朝鮮人が「満洲」へ逃れた。その他、この時期の朝鮮人の「満洲」移住の原因として、朝鮮における「土地調査事業」³⁾と「産米増殖計画」⁴⁾に始まる一連の植民地政策があった。これらの植民地政策により、朝鮮人農民は、土地を失い、深刻な貧困に陥った。また、帝国日本が朝鮮を植民地化した後、日本人が朝鮮に入ったため⁵⁾、それに押されて、朝鮮人が「満洲」へ移住した。

第3段階(1931～45年)は、日本の国策による移民の時期である。この時期は「満洲国」成立を契機として、朝鮮総督府内部において「満洲」への朝鮮人国策農業移民が政策として具体化し始めた時期である。朝鮮総督府は1931年に「鮮人移民会社設立計画案」、1932年に「満鮮農事会社設立計画」、1933年に「朝鮮人移民政策大綱」を作成した。この時期は朝鮮総督府と関東軍との交渉の過程でそれぞれの利害が表面化した時期でもあり、朝鮮人移民をめぐる朝鮮総督府と関東軍の間には見解上の対立があった。関東軍に影響力を持っていた「加藤完治グループ」⁶⁾は、日本人移民を優先的に受け入れるべきだと主張していた。朝鮮人の「満洲」への移住に関しては自由放任政策がとられていた。このような無秩序な状況は関東軍にとっても、朝鮮総督府にとっても望ましくはなかった。1941年に「満鮮拓殖株式会社」は「満洲拓殖公社」に統合され、日本人移民と朝鮮人移民の行政事務は一元化された。日本人移民「第二期五ヵ年計画」にともない、朝鮮人移民に対しても同様な移民計画が策定された。

II 朝鮮人の「満洲」への移住要因

本稿は国策移民の時期に焦点を当て、主に第3段階の移住要因を検討する。朝鮮総督府は朝鮮半島内の過剰人口を「満洲」に送り出し、内部矛盾を減らすのを目論んだ。当時、実質的に「満洲国」を支配していた関東軍は「満洲国」の治安維持を優先し、日本人移民の受け入れを歓迎する一方、朝鮮人移民の受け入れには消極的だった。しかし、戦争が進むにつれて日本人移民だけでは、日本政府が掲げた移民計画は達成できず、日本人移民の代替手段として朝鮮人移民に頼らざるを得なくなった。

同時に朝鮮半島内の小作争議の激化により、朝鮮人の「満洲」への国策移民政策が本格的に推進されるようになった。以下では1935年から1939年までの朝鮮半島の各道における小作争議件数の地域別推移状況を見てみよう。

表1 朝鮮半島の各道における小作争議件数の地域別推移状況(単位:件)

道名	1935年	1936年	1937年	1938年	1939年	計
京畿道	1,873	1,299	1,366	1,223	700	6,461
忠清北道	1,284	5,561	3,871	2,015	1,044	13,775
忠清南道	2,430	2,575	2,450	1,833	1,227	10,515
全羅北道	5,500	3,941	4,336	1,822	1,215	16,814
全羅南道	5,565	3,771	3,654	4,373	3,608	20,931
慶尚北道	2,514	3,365	3,984	2,483	2,089	14,435
慶尚南道	3,119	3,685	4,095	3,418	1,956	16,273
黄海道	1,241	974	1,378	1,192	783	5,568
平安北道	96	383	1,575	1,003	626	3,683
平安南道	1,215	1,350	1,527	1,323	1,486	6,901
江原道	734	2,677	3,144	1,559	1,102	9,216
咸鏡北道	—	38	1	2	—	41
咸鏡南道	263	366	418	350	616	2,033
計	25,834	29,975	31,799	22,595	16,452	126,655

出所：朝鮮総督府農林局編『朝鮮農地年報』(第1輯、1940年、9-20頁)に基づき筆者作成。

表1を見て分かるように、小作争議の件数は京畿道をはじめとする南部朝鮮地域が、黄海道をはじめとする北部朝鮮地域より多かった。『東亜日報』(1931年8月5日)に記載されている朝鮮4道の農民の状況からも当時の朝鮮半島の厳しい状況を確認できる。例えば、全羅北道の農家数が219,710戸でそのうち貧農数が136,758戸を占め、貧困率が62%にも達しておりもっとも高く、2番目が忠清北道の57%、3番目が京畿道の51%、4番目が慶尚南道の46%である。また当時、朝鮮では土地を失い、職を失う朝鮮人が溢れていた⁷⁾。このような状況のなかで、朝鮮半島の朝鮮人には「満洲」をはじめとする国外への移住の圧力がますます増大していた。ここに朝鮮人が「満洲」へ移住した理由の関連データが一つある。

表2 朝鮮人が「満洲」へ移住した理由

原因および理由	絶対数	相対数%
本国で経済的困難	30	14.9
金銭難	33	16.4
生活難	72	35.8
衣食難	2	1.0
事業失敗	24	12.0
旅行の結果	2	1.0
政治的理由	7	3.4
満洲農業の有利性	18	9.0
出稼ぎ	11	5.5
事業成功	1	0.5
親戚の勧誘	1	0.5
合計	201	100

出所：李勲求著、拓務大臣官房文書課訳編『満洲と朝鮮人』（1933年、105頁）より転載

表2から分かるように、「生活難」の比率が最も高く、これに「本国で経済的困難」と「金銭難」を加えると、約3分の2を占めている。満鉄調査部は朝鮮人が「満洲」へ移住した理由に関して、「鮮人の生活上経済的激変による農民層の生活困難のこと」[満鉄調査部1939:63]であると認めている。朝鮮人が「満洲」へ移住した主な理由は生活の困窮であった。移民の国外への移動を考察する際には、移民の出身地域を考える必要がある。1939年に朝鮮総督府は朝鮮各道に対して「集団移民」を組織するように通知を出した。

表3 割当見込戸数及各道割当標準表（1939年）

道名	割当率 (%)	割当見込戸数 (戸)
忠清北道	15	450
忠清南道	10	300
全羅北道	20	600
全羅南道	15	450
慶尚北道	25	300
慶尚南道	10	750
江原道	5	150
計	—	3,000

出所：満鉄調査部『満洲農業移民概説（産業調査資料第52編）』（南満洲鉄道株式会社、1939年、104-105頁）より転載。

ここで注目すべきことは、朝鮮総統府が出した「集団移民」を組織する地域がすべて南部朝鮮地域に限定されていたことである。

南部朝鮮地域は、小作争議が多発する地域でもあった。朝鮮総督府のねらいは、朝鮮において年々増加していた日本人地主に対する朝鮮人農民の小作争議を、「満洲」への朝鮮人の移住によって民族的矛盾と絡み合った階級的矛盾を緩和させようとするところにあった。南部朝鮮地域の朝鮮人が国策として「満洲」に送り込まれた歴史的事実を確認するために次の資料を見てみよう。1938年の「満洲開拓民選出ニ関スル件」において、「満洲建国ノ理想顕現ニ協力セシメツタアルガ一面耕地狭少ノ為多数零細農ヲ包擁スル本道(慶尙北道-筆者注)トシ開拓民事業ハ土地政策上極メテ重要(中略)過剰戸数ヲ転出セシムルヨウ積極的ニ措置スル」が書かれている[樋口, 2000:71-73]。この資料を読めば、当時の朝鮮半島、特に慶尙北道をはじめとする南部朝鮮地域は人口が多く耕地が少ないので、過剰人口を「満洲」に転出させようとする意図が読み取れる。

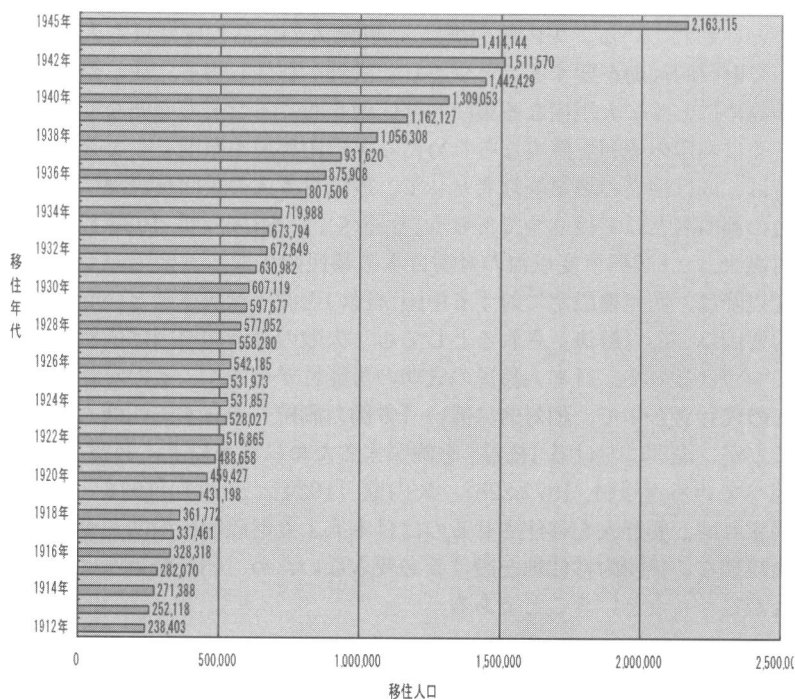


図1 「満洲」へ移住した朝鮮人の人口推移状況

出所：高崎宗司『中国朝鮮族』（明石書店、1996年、16頁）に基づき筆者作成。

在満朝鮮人は絶えず移動を繰り返しており、また多くの在満朝鮮人が僻地の農村に暮らしており、当時の人口状況を正確に把握することは難しい。1944年のデータは現段階でなお不明である。在満朝鮮人の人口状況を把握することが難しいのは、各調査機関によるデータの出し方にも起因すると考えられる。在満朝鮮人に対する統計が多種多様あり、例えば、朝鮮総督府、関東軍、拓務省、「満洲国」、満鉄、東洋拓殖会社、東亜勸業会社、朝鮮人民会などの機関はそれぞれの統計があるが、統計はそれぞれ違っており、千差万別であった〔孫, 2003:61〕。このような難しい状況のなかで韓国研究者の高崎宗司は、さまざまなデータを照らし合わせて在満朝鮮人の人口状況をまとめた。図1が示すように、1944年を除いて「満洲」への朝鮮人移民数は年々増加しており、1945年時点での在満朝鮮人の人口は200万人を超えていた。ここで留意すべきことは、1932年の「満洲国」が成立した後の人口増加数は、それ以前より多いことが読み取れる。

最後に朝鮮人「満洲」移民の移住要因を探る場合、日本人の代行者とした要因を考える必要がある。日本人の代行者として朝鮮人を「満洲」に移住させたといわれている。矢内原忠雄は、「朝鮮人の生活程度は日本人より低く、従って財政的補助を要すること少くして満洲へ移住し得る。故に恐らく朝鮮人の為めにとくに大規模なる集団的移住地を設くるなどの必要なく、土地所有若くは利用の権利を確実ならしめたる上自由移民を原則として入満を認むる時は、或は独立の農業経営者として、或は日本人の集団移民地に対する労働力の補給者として役立つであらう」と述べている〔矢内原, 1934:120〕。また、松村高夫は、「満洲事変以前の対満日本人移民の失敗した要因のうち、満洲事変以降は、商租権設定に対する中国官民の否認・抵抗運動という失敗の政治的要因は一応『解決』されるとしても、失敗の経済的要因は依然として存続しつづけるので、日本人移民の成功の可能性が小さく、そのかぎり、日本人の代行者として、相対的に低い『労働力価値』を有する朝鮮人を移民することが、満洲における『権益』を確保するために従来以上に必要となった」と述べている〔松村, 1972:228〕。矢内原〔1934〕と松村〔1972〕の議論を要約すれば、朝鮮人を移住させるのは日本人より財政的に補助が少なく、かつ大規模なる集団的移住地を設ける必要もないため、朝鮮総督府にとっては、都合が良かったということである。

Ⅲ 安全農村とは

安全農村とは、朝鮮総督府が、「満洲事変」(以下、事変と略称)の後、「満洲」の中国兵士によって襲撃された在満朝鮮人を保護するという名目で、1932

年から35年にかけて「満洲国」に建設した農場である。安全農村には、鉄嶺安全農村、河東安全農村、營口安全農村、綏化安全農村、三源浦安全農村があった。

表4 安全農村一覧

村名	設立年代	所在地
鉄嶺農村	1932年	奉天省鉄嶺県鉄嶺附近
營口農村	1933年	奉天省營口県營口附近
河東農村	1933年	滨江省珠河県烏吉密河站附近
綏化農村	1934年	滨江省綏化県綏化附近
三源浦農村	1935年	奉天省柳河県三源浦附近

出所：満鉄調査部『満洲農業移民概説（産業調査資料第52編）』
（南満洲鉄道株式会社，1939：77-78）より転載。

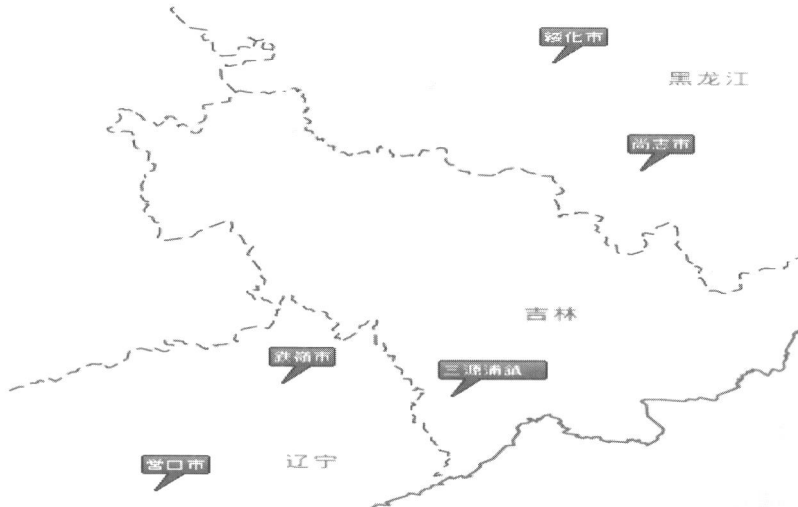


図2 安全農村跡地の所在地⁸⁾

1 安全農村に関する先行研究

安全農村についての研究は、少しずつ蓄積されてきた。金静美は、安全農村の問題を「満洲」抗日民衆史の一部として論じている [金, 1992]。洪鐘必は、安全農村を、在満朝鮮人を統制する機関という視点から捉えている [洪, 1997]。玄恩柱は、農業生産を通じた安全農村住民の経済状況について考察している [玄, 2003]。孫春日は、安全農村の建設を、事変により在満朝鮮人が大きな被害を受けたが、それを憂える朝鮮半島内の世論の圧力を受

けて、朝鮮総督府が、難民を保護する施設として設立したと述べている [孫, 2003]。金周溶は、營口安全農村と三源浦安全農村を事例として、安全農村の建設の過程と農場の運営状況について分析している [金, 2006]。金永哲は、安全農村と「集団部落」の相違点を、建設の背景と過程、外部と内部の相違点に分けて説明している [金, 2007]。朴敬玉は、河東安全農村を事例として、設立過程、土地の買収、村落の組織、営農実態について分析している [朴, 2015]。

先行研究は、全体として為政者側が作成した資料を分析して、安全農村が在満朝鮮人難民の保護という名目で建設されたという主張を批判するなど、安全農村の制度的側面について分析している。同時に先行研究は、もっぱら安全農村における植民地統治の側面について考察したものであり、安全農村体験者が安全農村をいかに認識したのかについては、あまり触れられることがなかった。植民地時代に朝鮮人が中国東北地域へ移住したことについて、十分に明らかにされてこなかった。

2 安全農村に関する為政者側の認識

為政者側は、安全農村に関してさまざまな認識を持っていた。東亜勸業株式会社編の『河東、營口、鉄嶺、綏化安全農村建設の経過並に現状』には、安全農村設立の趣旨が、次のように書かれている。

従来鮮農に対し比較的保護的傾向にあった東三省官憲は大正十四五年の交より、俄に其の態度を一変し、事毎に圧迫を加え遂に万宝山事件を誘致しその頂点として昭和六年九月に遂に満洲事変の勃発を見るに至ったのである。在満朝鮮人の本事変による打撃は実に想像以上のものがあつた。即ち時遇々収穫期に際会した為、其の多くは目前に豊穰なる収穫を眺めつ々之を放棄し、沿線安全地帯に避難するの止むなき状態の至った者は夥しき数に上つた [東亜勸業株式会社編, 1934:1]。

東亜勸業株式会社は、朝鮮人農民が中国の官憲の圧迫を受けたため、万宝山事件が発生し、その延長線上で事変が勃発して、在満朝鮮人が被害を受けたとしている。朝鮮総督府の機関紙『京城日報』の連載記事において、營口安全農村について特集が組まれた。そこにも、為政者側の認識が見られる。

警備に関しては本事業が開始されて以来、營口領事館並に同警察署の好意に依り多数の警察官の駐在を見る一方、大石橋守備隊の随時出勤を得たので、従来匪賊の巢窟といわれたこの地方も今では殆ど匪影を止めず、村民は名実共に安全農村を謳歌している。尚おこの地方の警備充実は延ては營口市内の安全を齎して營口市街警備の第一線をなす状態である。目下農村事務所及び

揚水場には約二十名の警察官が駐在し警備及治安に当たっているが、万一匪賊の襲撃を受けた場合には、二本の警備電話によって営口に急を報じこの電話線が二本とも切断された時は十数尺の物見台に烽火を揚げて営口に知らせば約三十分間にして援兵が来ることになっており近来奉山支線の警備も充実し、この地方の治安は愈よ整った〔『京城日報』1935.7.20〕。

為政者は、「匪賊」からの攻撃を防ぐため、警察官と軍隊を後ろ盾に治安の維持に力を入れた。その時、その地域に住んでいた人びとの暮らしのことは、考慮されなかった。安全農村が建設された地域は、無人地域ではなかった。為政者は、安全農村を建設するため、その地域に住んでいた人びとを追い出した。たとえば、河東安全農村を建設した際に、そこに住んでいた人びとを追い出して避難民を收容したという、為政者側の記録が残っている。

本安全農村の収用予定地は記述の通り約二千五百町歩の既耕地であるが、此等の土地は何れも先住朝鮮人又は満洲人の耕作地であるから、此処に移民を入れる為には此等先住者を立退かせ、そして土地を商租するを必要とする次第である〔満鉄資料課編, 1934:100〕。

このようなやり方のため、中国人と朝鮮人の間に摩擦を生じた。住んでいた人びとを追い出せば、その人びとが難民になり、「匪賊」になることは、自然の成り行きであった。朝鮮人が渡満した初期には、「日本帝国主義の満洲に対する侵略政策が本格化する以前において中国人、朝鮮人の関係が比較的良好なものであった」〔依田, 1976:498〕。しかし、日本帝国の圧力が強くなるにつれて、中国人は、朝鮮人を中国侵略の尖兵と見做し、中国人と朝鮮人の関係が対立的になっていった。山室信一がいうように、「この対立連鎖をひき起こす要^{かなめ}となっているのは、当然のことながら日本であったが、現実の場面では農業に従事する在満朝鮮人と中国人との対立、紛争として多く現われ、1928年から30年にかけて各種圧迫事件は表面化しただけでも百件ののぼり、そのうねりの頂点において万宝山事件(1931年5月～7月)が発生した」〔山室, 2004:39〕。この事件は、中村震太郎大尉殺害事件とともに、満蒙問題強硬解決の世論を煽り立て、関東軍が満洲事変を画策する材料として利用された〔山室, 2004:39〕。

以上の議論から、また、事変が関東軍による自作自演であったことを考えると⁹⁾、安全農村の建設が、避難民を保護するためであったという主張は、つじつまが合わない。なぜなら、安全農村を建設する計画は、事変の前から計画されていたからである。本来の安全農村建設の計画は、在満朝鮮人の避難民の收容とは関係なかった。

3 安全農村が建設された背景

金永哲によれば、安全農村は、3つの建設時期に分けられる〔金, 2007:44-45〕。第1期は、1932年から1933年にかけて建設された鉄嶺安全農村、営口安全農村、河東安全農村であり、第2期は、1934年に建設された綏化農村であり、第3期は、1935年に建設された三源浦安全農村である。三源浦安全農村の建設は、他の安全農村と経緯が異なっており、「完全に抗日パルチザンを民衆から切り離し孤立させるために建設された」〔金, 2007:45〕。安全農村が建設されたのは、治安が比較的安定していた満洲鉄道の沿線附近であり、稲作農業に適した地域であった。これに対して、ほぼ同時期に、朝鮮総督府と関東軍は、「集団部落」を、朝鮮民族独立運動が盛んに行われた間島地方（現在の延辺朝鮮族自治州）に建設した。

安全農村が建設された背景には、為政者側のさまざまな思惑があった。並木孝三は、「内地に於ける鮮人労働者問題の行き詰まりと関連して考えると、一層切実になってくる、今安全農村に関し記述する前提として、内地に於ける鮮人労働者問題がいかに行き詰まりの状態にあるか」について考察する必要があるという〔並木, 1935:76〕。並木は、「然しこれ等鮮人の大部分が大都市に集中し労働者就中日傭労働者として、失業と飢餓線上を彷徨せる状態にある」と述べている〔並木, 1935:76〕。つまり、朝鮮人労働者の都市への集中は、都市の労働力過剰をもたらし、失業や貧困などの社会問題を生じ、人びとを日本へ移民として押し出す誘因となった。1934年10月30日に、日本政府は、日本へ渡航する朝鮮人に関する対策として、「朝鮮人移住対策の件」を決定した。この移住対策要目の第3項には、朝鮮人の内地渡航をさらに減らすべしとある。当時は、日本国内においても失業問題が深刻化しており、朝鮮人の日本渡航制限が強化された。同時に、朝鮮人の満洲への移住を促すことになった。伊藤一彦は、「並木の主張は、満洲・朝鮮・日本を有機的に結びつけ、そのなかで安全農村というものをとらえかえしていく点に特徴があり、それはのちの『日満一体化』『鮮満一如』といった戦時イデオロギーのさきがけをなすものである」と述べている〔伊藤, 2008:298-299〕。伊藤の分析は、正鵠を射ている。安全農村の建設には、植民地朝鮮の過剰人口が日本国内に流れることを止め、移住の流れを「満洲」へ転換させる意図があった。

IV 安全農村体験者の体験談から

1 調査概要

旧「満洲」の中国東北地域には、朝鮮半島から移住した朝鮮人「満洲」移民の体験者（以下、移民体験者）が、今も住んでいる。筆者は、2006年から現在まで96名の移民体験者に会い、インタビューを行ってきた。移民体験者との出会いは、役場、老人協会¹⁰⁾、養老院¹¹⁾による仲介、体験者による紹介によって可能となった。また、朝鮮語の新聞¹²⁾により、体験者を探すこともあった。

表5 安全農村体験者の一覧表

氏名	性別	出身地	生年	移住年代	暮した安全農村
田辛秀さん	男性	慶尚南道宜寧郡	1928年	1936年	鉄嶺安全農村
李圭善さん	男性	慶尚北道統営郡	1926年	1934年	營口安全農村
L Dさん	男性	慶尚北道善山郡	1927年	1937年	營口安全農村
尹英順さん	女性	慶尚北道青松郡	1930年	1937年	營口安全農村
権弼蘭さん	女性	慶尚北道慶州郡	1925年	1936年	綏化安全農村
洪福南さん	女性	慶尚北道永川郡	1925年	1936年	綏化安全農村
X Kさん	男性	慶尚北道永川郡	1928年	1939年	綏化安全農村
具鳳順さん	女性	慶尚北道慶山郡	1926年	1940年	綏化安全農村
李鐘瑞さん	男性	忠清北道陰城郡	1919年	1941年	綏化安全農村
李福順さん	女性	忠清北道陰城郡	1929年	1941年	綏化安全農村
金柳漢さん	女性	慶尚南道蔚山郡	1924年	1936年	河東安全農村
安晩植さん	男性	慶尚南道咸陽郡	1929年	1937年	河東安全農村
朴京姫さん	女性	慶尚南道昌原郡	1921年	1940年	河東安全農村
柳浜さん	女性	慶尚北道尚州郡	1929年	1944年	河東安全農村

表5に見られるように、安全農村体験者の多くは、入村した時はまだ幼かった。筆者は、5ヵ所の旧安全農村で聞き取りをした時、安全農村体験者は、口々に「どうしてもっと早く来なかったの」、「親の世代だったらもっとくわしい話が聞けたのに」と残念がった。体験者の多くは、成人するまで安全農村で暮し、生活のなかでさまざまに植民地主義を体験した。戦争と植民地を体験した世代が歴史の舞台から退いていく。そのような時代に、存命する安全農村体験者の声を聞き、記録に留めることには、重要な意義がある。

2 制限された安全農村への入村

為政者側が作成した資料のほとんどは、安全農村に入ったのは、事変後の在満朝鮮人の避難民であったというが、安全農村には、朝鮮半島から直接移

住した人びともいた。しかし、だれでも入村できるわけではなかった。朝鮮総督府は、収容家族の選定要件として、思想堅実にして勤勉なるもの、家族中労働し得る者2人以上あるもの、転住して農業を営め得ざるものと定めた〔朝鮮総督府 1938:109-110〕。

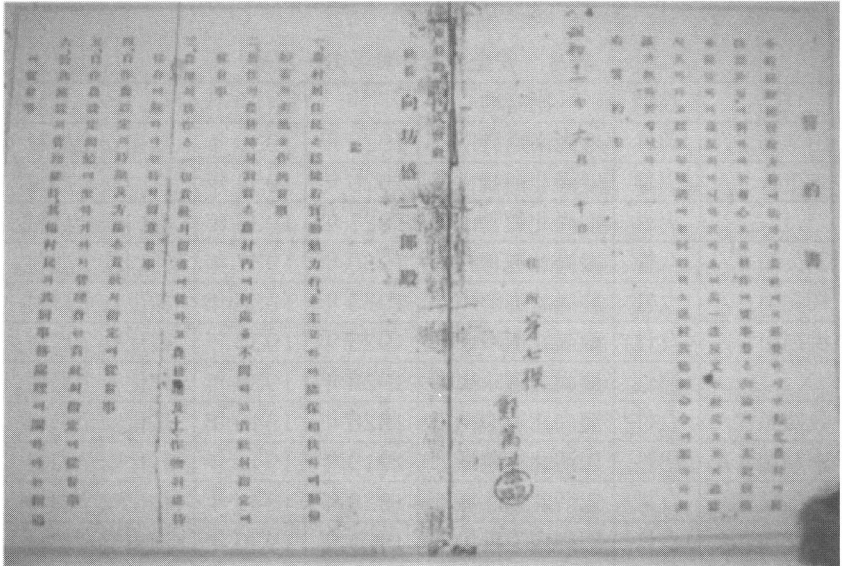


図3 入村誓約書

出所：鄭吉泳『興和五十年』私家版、1997年。

誓約書は緩化安全農村の第7稜に入村した鄭万琪という者が、1936年6月10日の日付で東亞勸業株式会社の社長である向坊盛一郎宛てに書かれている。誓約書の内容は以下の通りである¹³⁾。

今般朝朝鮮総督府の方針に依って貴社が経営する緩化農村に居住認許されたことに対して、専念して耕作に従事することは無論のこと、左記の条項を厳守する。万が一違反または村民として適当でないと認定された場合、いつでも退村やその他の命令に服し、異議申し立てしない。

誓約書の条項には以下の6項目が記されている。

1. 農村居住民は穩健着実勤勉力行を主とし隣保相扶して勤儉貯蓄の美風を作興すること

2. 居住と農耕地の割り当ては農村内の何処であっても問わないで貴社の指定に従うこと
3. 農地の耕作は一切貴社の指導に従い、農耕地及工作物の維持保存に関して特に留意すること
4. 自作農設定の時期及方法は貴社の指定に従うこと
5. 自作農設定開始に至るまで管理費は貴社の指定に従うこと
6. 公共施設の管理維持、その他村民の共同事務処理に関して指導に従うこと

この誓約書の内容を見て分かるように、安全農村で朝鮮人を収容するためにはさまざまな制限があった。つまり、朝鮮人が安全農村に入るには条件があり、入村誓約書が必要で誰でも入れるわけではなかった。

3 さまざまな安全農村入村者

安全農村には、多くの朝鮮人が住んだ。1935年9月時点で、安全農村の人口は、11,382名に及んだ〔梶村, 1993:187〕。朝鮮人が「満洲」へ移住した要因はさまざまである。筆者はインタビュー調査を通して、移住の複雑な要因を確認することができた。本節では、安全農村体験者の体験談だけに絞って論を進める。戦前、朝鮮半島の日常生活の隅々まで日本の植民地統治が執行された。植民地統治が厳しく生活が困難のために、「満洲」に渡る朝鮮人移民が少なくなかった。

日本人のお墓のお供えを盗んで食べたことがあった。怒られることもあった。今だったら汚いと思って食べないだろうが、その時は食べ物がない。 (権弼蘭さん、1936年渡満)

日中戦争勃発前の春に「満洲」に渡りました。最初は叔父が住んでいた河東安全農村に入りました。(中略) 百姓が生活できなくなりました。圧迫や搾取に耐えられなくて「満洲」に渡りました。ほとんどの朝鮮人はそうではないですか。(安晩植さん、1937年渡満)

我が家が移民したのはその理由です。その理由はまさに『洛東江』¹⁴⁾ という詩が書いているように、イルボンノム(「日本の奴ら」)が入る前に貧しかったけれども、平穏な生活を送っていました。イルボンノムが入ってきたから、朝鮮人が続々と海外で行きました。(LDさん、1937年渡満)

朝鮮での生活は貧しかったです。食べ物ほとんどありませんでした。(中略) 14歳に時に結婚しまして、19歳の時に夫と一緒に中国に来ました。2月でゴム靴を履いて来て寒かったです。(朴京姫さん、1940年渡満)

お墓のお供えを盗んで食べたことは、当時の貧しい生活のなかの人間模様をリアルに現れている。LDさんの語りで言及した『洛東江』が書かれているように、日本人が朝鮮に入ることによって、普段の生活ができなくなった。安晩植さんが代言しているように、ほとんどの朝鮮人は生活困難であるうえ、植民地統治に耐えられなくて「満洲」に渡った。家族や親族を頼って「満洲」に渡った人びとが多かった。

父親が生きていた時は水田と畑を持ち、何人かの小作農を雇っていました。タバコの商売もしていました。生活は裕福でしたので、兄は書堂に行ってお勉強することができました。しかし、父親が病気で亡くなって小作農たちが離れてしまい、農作業ができなくなったため、河東にいる親戚を頼って来ました。(金柳漢さん、1936年渡満)

その頃は、朝鮮では「満洲」に行けば犬でも白米が食べられる、という噂が広まっていました。私たちは、叔母(父方の妹)を頼ってここへ来ました。(中略) 綏化安全農村には綏化第一農村と綏化第二農村がありました。私の家族が入ったのは、綏化第二農村(現在の勤労村)でした。綏化第一農村には朝鮮半島の各道からきた移民がいましたが、綏化第二農村の人たちはほとんどが慶尚道から来ました。(X Kさん、1939年渡満)

今、このようなことをいうのは、恥ずかしいが、私の家は貧しかったです。(中略) 戦前、家計を助けるために母親は餅を売ったり、保母をやったりしましたが、私が11歳の年に病気で亡くなりました。翌年5歳になる一番下の弟も亡くなり、父親と2番目の弟と3人で生活しました。13歳から15歳まで他人の家で保母をしました。1943年12月に結婚し、1944年1月に夫が先に「満洲」に渡り、その年の3月に夫を頼りに「満洲」に渡りました。(柳浜さん、1944年渡満)

水野直樹は、「20世紀前半の東アジアにおける国境・地域を越えた人口・

労働力移動を促すシステムがつくられていったと考えられる。それは、特に日本帝国の支配圏の拡大、日本資本主義の発展による労働力需要などの要因によって形成されたものである。(中略)朝鮮人の国外移住は、東アジアに生じた労働力移動の重要な一環であった」と述べている〔水野1999:256〕。上記の3人が語った家族や親族を頼って「満洲」への移住は、水野がいう東アジアに生じた労働力移動の一環でもあるといえよう。

さらに、特異な移民体験を持つ安全農村体験者がいた。李福順さんと李鐘瑞さん夫妻は、綏化安全農村に入村したとき、働き盛りであった。李夫妻は、太平洋戦争が勃発した1941年に、ソ満国境の黒河へ移住した。

一番上の兄さんは、徴兵を避けるために、先に開拓団に加わりました。残りの家族は後に来ました。私たちが移住したばかりのとき、龍鎮に水田はありませんでした。食べるものはジャガイモしかありませんでした。開拓団から逃げ出す朝鮮人は、後を絶ちませんでした。(李福順さん)

故郷で移民の募集がありました。最初は、宣伝隊として男性だけが選ばれました。全員が忠清北道の出身者でした。家族は後で来ました。私たちが来たばかりのとき、土で塀をつくりました。日本人は土地をくれましたが、開墾した土地だけでは生活できませんでした。(李鐘瑞さん)

李福順さんは、徴兵を免れるため、先に開拓団に加わった兄を頼って移民した¹⁵⁾。

移住地の龍鎮で、李鐘瑞さんと結婚した。1945年2月、龍鎮での生活に耐えられず、李夫妻は、開拓団を脱出して綏化安全農村に入り、そこで終戦を迎えた。綏化安全農村の入村者には、李夫妻の他に、まったく異なる経歴を持つ入村者がいた。

村には、1937年にスターリンに追放されて逃げてきた朝鮮人もいました。6家族いたと覚えています。(中略)同級生には、ウラジオストックから逃げてきた許丙男と許乙男兄弟がいました。(X Kさん)

戦前にソ連に渡り、その後「満洲」に逃れたという経緯は、朝鮮人が複雑な移動を経験したことを教える。移民体験者の言葉から、安全農村は現地の避難民だけではなく、多様な背景の朝鮮人を収容していたことが分かる。

また、筆者のインタビュー調査に基づけば、植民地朝鮮では「処女供出」

という名目での若い女性の連行があった。尹明淑によれば、当時の新聞には、「徴用」の同意語として「供出」という用語が用いられており、一般民衆は未婚女性の動員を「処女供出」と表現していた。朝鮮語で「処女」は未婚女性を指す総称であり、「供出」は官憲による強制的な動員を意味する言葉である [尹2003:297]。少なくない朝鮮人女性が「処女供出」を避けるため、個人あるいは家族で「満洲」へ移住したことも考えられる。しかし管見する限り、この事実に関する文献資料および先行研究は見当たらない。その事実を確認するため、植民地と戦争を体験した当事者たちの証言を聞き取るしかない。

「日本の奴ら」は、女たちを連れて行きました。(中略)私が保母をやっていた時、部屋の中から直接連れて行く場面を見ました。周りの人に気をつけなさいと言われました。(柳浜さん、1944年渡満)

柳浜さんは、静かに語ったが、14歳の時に「満洲」に渡った具鳳順さんは、渡満の理由を次のようにやや感情的に語った。

朝鮮での生活があまりにも苦しかったので、母親は先に私と兄を送り出しました。生活困難な理由もあったが、朝鮮で「処女供出」の徴集があったので、それを避けるために婚姻の紹介を受けて来ました。(具鳳順さん、1940年渡満)

具鳳順さんへのインタビューはハルビン市内の養老院で行った。当日、他の数人の事例を含めて座談会式のインタビューを行った後、分かれる際に具鳳順さんは筆者に向けて、「日本に行ったら、チョソンサラム¹⁶⁾がどれぐらい苦労したのかを日本人に伝えてください」と言い残して自分の部屋に戻った。筆者の調査によれば、安全農村体験者のほかにも、「処女供出」を逃れるために渡満した人びとがいた¹⁷⁾。具鳳順さんは「処女供出」から逃れるために亡命のような形で「満洲」へ移住した。その他、半ば強制的に移住させられた安全農村体験者がいた。

朝鮮を出る前に、各地から集められた朝鮮人が、大邱で一列に並ばされました。列が少しでもずれると、殴られました。汽車に乗るまえに、ある幹部の日本人が、北満洲にご飯を食べに行くから、移民になりたい人は手を上げるようにといました。手を上げなかった人は、引っ張り

出されて、どこかへ連れて行かれました。(洪福南さん、1936年渡満)

当日、座ってインタビューを受けていた洪福南さんは大邱で汽車に乗った際の話になったら、急に立ちあがって体をピシッとして「皇国臣民の誓詞」を暗誦した。洪福南さんの言葉にあるように、安全農村への朝鮮人の移住は強制的であった。戦時中、多くの朝鮮人が「満洲」へ移住したのは、戦争に備えて日本軍に食糧を供給するという要因もあると考えられる。日中戦争が勃発した年の1937年に渡満したLDさんの言葉からも、その様子が知られる。

営口安全農村に関する記録がどうなっているか分かりませんが、「日本の奴ら」が直接支配した朝鮮総督府が、第二次世界大戦で日本軍の食糧供給を保障するために、朝鮮八道の朝鮮人を連れてきました。(LDさん)

LDさんによれば、父親が金融組合に借金して朝鮮人参の栽培を始めたが、収穫した頃に朝鮮人参の値段が暴落した。借金は農業だけでは返済できなかった。そのため、父親の決断で移民団に加わった。それは、移民団に加われば、今までの債務を返済しなくてもいいと、朝鮮総督府側にいわれたからである。

当初は家族のみんな、ありがたく思っていました。「満洲」に渡ってからは、朝鮮総督府が朝鮮人移民団を募集したのは、関東軍に食糧を供給するためだと分かりました。村では、米は全部供出しなければなりませんでした。(LDさん)

実際、LDさんが移住した営口安全農村で生産された米は、軍用に供された。1937年度には、もみ45,000石が軍用米として納入された [金1992:328]。

4 日常生活の側面からみた安全農村

この節では、安全農村体験者の日常生活の側面から安全農村について考察する。水野直樹は、植民地支配が人びとの生活をいかに捉えていたかについて分析した [水野編2004]。水野は、植民地主義を人びとの生活のなかで考えることの重要性について、以下のように指摘している。

植民地主義の問題は、(中略)言説分析というレベルにとどまらず、被支配者の生活に即しても考察しなければならないのではないか。植民地支配のもとで形成された生活様式や生活にかかわる規範に植民地主義がどのように投影されているのか。そしてそれが植民地支配から解放後も、人びとの生活のありようをいかに束縛することなのか。その具体的な様相を明らかにすることが、植民地主義を解体するためには大きな課題となっていると考えられる [水野, 2004:16]。

帝国日本が統治した植民地朝鮮と「満洲国」において、人びとの生活に植民地主義が浸透していた。為政者側は、安全農村が在満朝鮮人を保護するものであると強調したが、インタビューで浮かび上がったのは、戦時中の朝鮮人の管理と動員の実態である。緩化安全農村に収容された洪福南さんにその移民体験を聞いた。

最初の頃、同じ長屋に、慶尚道から移住してきた8家族が、いっしょに住みました。その長屋は、元は中国人農民の家でしたが、日本人が追い出して、朝鮮人移民を入れました。村に入った頃、その長屋の居間は馬糞だらけで、井戸のなかにも馬糞が入っていました。中国人農民は、追い出されたことを怨んで、そんなことをしたのだと思います。井戸が使えなかったので、仕方なく、雪を溶かして飲みました。(洪福南さん)

緩化安全農村には、中国人農民が住んでいた。為政者は、中国人を追い出して、朝鮮人移民を移住させた。そのため朝鮮人は、中国人農民の恨みを買った。洪福南さんと同じ汽車で「満洲」に渡り、同じ村へ入った権弼蘭さんも、次のような移民体験を語った。

日本人は中国人農民を追い出して、私たち朝鮮人を入れました。中国人農民の襲撃を防ぐため、私たちが入った部落の周辺は、塙に囲まれていました。井戸に、馬糞を入れられました。中国人農民は、追い出されたことを怨んでいました。バケツで井戸の水を汲んでも、汚い水が出るばかりでした。仕方なく、雪を溶かしてご飯を炊いて食べました。井戸の水が使えなかったので、洗濯もできませんでした。(権弼蘭さん)

植民地統治者は、武力で中国人農民を追い出して、朝鮮人を移住させた。

中国人農民は、馬糞を井戸に入れたり、居間にばらまいたりして抵抗した。権弼蘭さんは1943年に同じ村の慶尚道出身の男性と結婚し、翌年長女が生まれた。「日本の奴ら」は米を全部持って行って腐った粟を食糧としてくれた。腐った粟でご飯を炊いたらご飯は真っ赤だった。長女は栄養失調になり、一時胃口が歪んだという。続けて権弼蘭さんは安全農村に入った後の状況を紹介してくれた。

綏化安全農村のなかには9つの部落に分けられました。ほかの部落には朝鮮半島のほかの地域からきた朝鮮人もいましたが、私たちが入った部落にはすべて慶尚道の出身者でした。(中略)入村した人には一戸に2.4町歩の土地が与えられました。実家では農作業をするために借金して牛一頭を買いました。債務を返済したらほとんど穀物は残らなかったです。(権弼蘭さん)

筆者の調査によれば、安全農村体験者には、稲作農業の経験のある慶尚道や忠清道等の朝鮮半島南部地域の出身者が多かった¹⁸⁾。安全農村は、北満と南満の稲作が盛んな地域に建設されており、在満朝鮮人が多く暮す畑作を主とする間島ではなかった。安全農村における米の供出について、1936年に鉄嶺安全農村に入った田辛秀さんは、次のように語った。

朝鮮で生活が苦しかったので来ました。村に入った後も、ご飯を満足に食べることはできませんでした。秋に米を収穫したら全部持って行かれて、その代わりに粟をもらいました。戦争が終る頃に、日本人は、米をもっと徴集しようとして、米を供出すると布をもらいました。兄の家は、布をもらったことがあります。安全農村は、安全に米を供出する場所でした。(田辛秀さん)

田辛秀さんは、「安全農村は安全に米を供出する場所でした」と語った。戦争末期、米を供出すれば、布を与えるような融和政策がとられた。安全農村では、徹底的に米の徴収が行われた。

米を全部持って行かれました。藁まで持って行かれました。その代わりに粟をくれました。(中略)母親が白を隠しましたので、殴られました。(尹英順さん)

稲を収穫して脱穀すると、屯長が人を連れてきて、各戸を回って穀物を徴収しました。脱穀は足踏み式でした。藁に稲を残さずにきれいに脱穀するように命じられました。臼で稲を搗いて食べるのを防ぐために、臼が見つかったら没収されました。それでも、家に小さい臼を持っていました。没収されないように、庭に穴を掘って臼を隠して、深夜か未明に、臼で稲を搗いて密かに米を食べました。(LDさん)

農業をしても、米を満腹に食べるができなかった。藁まで持って行かれたこと、臼が没収されたことに、植民地支配の厳しさが偲ばれる。また、学校生活にも戦争の陰影が重くのしかかっていた。

戦時中、生徒たちまで持ってくるといわれたものは全部持っていかなければなりません。牛の毛、馬の毛、犬の毛などを献納しなければなりません。また、山に行って薬剤を取って献納しなければなりません。義務付けられました。持っていかなければ罰せられました。生徒たちを連れてよく労働しました。農作業もしなければなりません。体育の授業で軍事訓練もよく行われました。(安晩植さん)

安晩植さんの言葉から分かるように、戦時中、小学校に通う幼い子供まで、戦争の準備に動員されていた。そして、安全農村の青年は徴兵に駆り出された。

赤紙がきた朝鮮人の青年たちの見送りをしたことがありました。營口安全農村で徴兵される人たちは中央屯に集められて、汽車に乗って盤山に行きます。朝鮮人の青年たちが酒に酔った振りをし、拳で汽車の厚いガラスを打ち破って血まみれになった光景を何度も見かけました。朝鮮人の青年たちはまるで狂ったようでした。徴兵されたことに反抗したかったが、他に表現する方法がなく、そのような痛ましい行動でやりきれない心情を表していたのではないですか。(LDさん)

18歳になった1945年に、海城で軍事訓練を数ヶ月間受けました。同じ鉄嶺農村からも多くの朝鮮人青年が選ばれていました。赤紙が来て、戦場に駆り出された人もいました。日本の敗戦が近くなった時、統治がますます厳しくなりました。ラジオをもつ朝鮮人もいましたが、没収されました。外からの情報を遮断するためということでした。(田幸秀さん)

田辛秀さんが暮した鉄嶺安全農村で、赤紙が来て戦場に駆り出された青年がいた。また、田さんも軍事訓練を受けた。敗戦間際になった時期は、ラジオまで没収された。営口安全農村で、赤紙が来た朝鮮人青年を見送ったLDさんは、いつか自分も徴兵されるのではないかと不安であった。友人とともに村から逃げて、「抗日連軍」に加わりうと考えた時期もあった。

その頃、希望はありませんでした。今日も明日も、希望のない生活を過ごしていました。(LDさん)

LDさんは、植民地統治を受け、戦争の恐怖に晒されながら、希望のない日々を暮した。安全農村に入る人も、そこから脱出する人もいた。

私の家族が最初に入ったのは、営口安全農村でした。ちょうど安全農村ができたばかりの時期で、朝鮮人がたくさんいました。農業をしても、脱穀後、米はすべて徴集されました。小さいとき、脱穀前の稲を盗んで食べたことがありました。臼が没収されてしまったので、稲を瓶に入れて棒で搗いて食べました。何度も稲を盗みました。両親は、「自分の家の水田なのに、働いても米が食べられない。このままでは子どもたちが悪いことを覚える」といって、安全農村から脱出する計画を立てました。安全農村では、人びとを相互監視させる連帯責任制をとっていました。そのため、1936年のある夜、他の村民に知られないように、夕食後、食器をそのままにして密かに脱出しました。(李圭善さん)

李圭善さんが語った「人びとを相互監視させる連帯責任制」とは、「保甲制度」のことである¹⁹⁾。住民が厳しく相互監視された。植民地統治者は、朝鮮人移民を保護するという名目で、朝鮮人を管理した。李圭善さん一家は、安全農村を脱出した後、内モンゴル地域の前国旗に行った。しかし、そこでも帝国日本の監視から逃れることはできなかった。李圭善さんは、朝鮮人徴兵3期生に乙種で合格し、1945年6月から2ヵ月間、ハルビンの顧郷で軍事訓練を受けた。幸いにも、軍事訓練が終る前に戦争が終った。

5 動員される客体であった安全農村の人びと

本稿は安全農村体験者の移住要因と日常生活の側面に焦点を当て、安全農村について考察し、歴史の影に隠されてきた朝鮮人「満洲」移民の体験の可

視化を試みた。朝鮮総督府が建設した安全農村の場所は、朝鮮半島ではなく、関東軍が支配していた「満洲国」であった。当時、「満洲国」各地で反満抗日運動が行われており、関東軍は、「抗日連軍」の討伐に懸命であった²⁰⁾。安全農村は、そのような植民地と戦地が重なる地域であった。安全農村体験者は、帝国日本の中心を移動したのではなく、周辺から周辺へ移動し、戦争と植民地の狭間に生きた人びとである。安全農村体験者は、植民地朝鮮と「満洲国」の双方を体験した。

歴史学者の外村大は、植民地時代の朝鮮人移動の実態と、それをめぐる当時の議論や日本政府の施策を概観して、植民地時代において、「日本人は朝鮮人を対等な存在ではなく、動かされるべき客体として認識していた。そして、日本人の利益のために自分たちが忌避するような劣悪な条件・環境の職場や地域への配置や、移動の抑圧、移動先での管理を通じて日本人中心の社会秩序を維持しようと目論んできた」と述べている〔外村, 2011:19〕。貧困や徴兵、「処女供出」を避ける等の理由で、多くの朝鮮人が、「満洲」へ移住した。しかし渡満しても、朝鮮人は安全農村のような特別の地域に入ることをよぎなくされた。安全農村は、移住者を封じ込める役割をもっていた。李圭善さんが語ったように、安全農村では、「相互監視の連帯責任制」によって、村民の離村を防いでいた。しかし、李圭善さんとLDさんが語るように、そこから脱出する人びともいた。安全農村から脱出しても、李圭善さんが、徴兵検査に引っかかり軍事訓練を受けたように、帝国日本の支配から逃れることはできなかった。

本稿の事例を通して分かるように、当時、戦争の陰影が民衆の生活全般に重くのしかかっていた。日本が引き起こした日中戦争は中国人に被害を与え、朝鮮人は戦争の資源と見なされ、在満朝鮮人まで戦争に駆り出されていった。帝国日本は、朝鮮半島や「満洲」を植民地として、戦争に突き進んだ。安全農村で米の徴収は厳しかった。戦争の末期には米を供出すれば、布を与えるという融和政策がとられ、戦時動員が行われた。安全農村は、「安全」を装いながら、朝鮮人を統治する施設であった。入村者は客体としか認識されていなかった。

V おわりに

日本の帝国史・植民地史を専門とする山本有造は、「公式の日本帝国は、『内地』を中核とし、その外周を『純領土たる外地』と『準領土たる外地』が取りまく三重の円構造として描くことができる」と述べている〔山本, 2004:68〕。つまり、朝鮮人「満洲」移民は、「純領土たる外地」である朝鮮

半島から「準領土たる外地」である「満洲」へ移住して、2つの外地を生きた。朝鮮人「満洲」移民は、帝国日本の中心から周辺へではなく、周辺から周辺へ移動した人びとである。そのため、朝鮮半島が日本の植民地であった時代に朝鮮人が朝鮮半島から中国東北地域へ移住したという事実は、十分に注目されてこなかった。

本稿は、朝鮮人「満洲」移民の移住動態と関連づけて安全農村を考察した。筆者のインタビュー調査対象者のなかには、小作争議が多発の南部朝鮮地域の出身者が多く、特に安全農村に移住した朝鮮人移民は慶尚道出身者が多かった。つまり、「純領土たる外地」である朝鮮半島から「準領土たる外地」である「満洲」への移住者が多かった。為政者側は、在満朝鮮人を保護するため、安全農村を建設したと強調する。しかし、筆者の調査によれば、朝鮮半島から直接安全農村に移住した人も多かった。事変直後だけではなく、日本の敗戦までに安全農村への入村者は続いていた。また、先行研究の多くは、安全農村に入ったのは、事変前に渡満した人びとであると述べている²¹⁾。

このような認識は、史料の制限によるものと思われる。史料のほとんどは、為政者側が作成したものであり、為政者側に都合のいいことしか書かれていない。

本稿で論じたように、安全農村は為政者が名づけたものであり、安全農村体験者や安全農村の跡地に住む人びとは、そのような名でさえほとんど知らない。安全農村の建設によって、帝国日本は、いわば一石三鳥の利を得た。つまり、朝鮮総督府は、過剰人口を「満洲国」に送り出すことができた。「満洲国」を支配した関東軍は、在満朝鮮人の管理が容易になった。日本政府は、朝鮮人の内地流入を軽減することができた。

安全農村が建設された地域は、無主地ではなかった。安全農村は、中国人農民を追い出し、朝鮮人を移住させて建設された。その結果、中国人と朝鮮人の間に摩擦が生じた。このように、帝国日本は敗戦まで、朝鮮半島で夥しい故郷喪失者を作り出し続けた。為政者側は、安全農村の朝鮮人保護の側面を強調したが、本稿でみたように、安全農村は、朝鮮人を管理し、動員するためのものであった。本来の安全農村建設の計画は、在満朝鮮人の避難民の収容とは関係なかった。安全農村の「安全」とは、帝国日本の支配者のそれであって、支配された側のそれではない。

注

- 1) 「満洲」への朝鮮人の移住が始まった時期についてはさまざまな説があるが、本研究の課題ではないので立ち入らない。朝鮮人の「満洲」への移住の時期をめぐって、これまで土着民族説、

元末明初説、明末清初説、19世紀中頃説などが主張されてきた。朝鮮人の「満洲」への移住の起源説に関しては、鶴嶋 [1997] が詳しい。

- 2) 1910年に、大韓帝国は、日本に併合されたが、朝鮮の民衆は、日本による併合に不満を抱き、統治を支持しなかった。そうしたなかで、死んだ前国王(高宗)の葬儀が行われる2日前の1919年3月1日に、ソウル(旧京城)で「独立万歳」を叫ぶ大規模なデモが行われた。この運動のはじめの頃は、平和的に行われていたが、朝鮮総督府が武力で弾圧したため、運動は暴動化して、多くの死傷者を出した。
- 3) 「土地調査事業」は、朝鮮の植民地化初期に行われた土地の所有権、価格、地形、地貌等の調査・測量事業である。(中略)この事業の結果、総督府財政の基礎が確立し国有地が創出される一方、事実上の農民的土地所有を否定されたり、土地を収奪された農民が小作人に転落して地主的土地所有が再編・強化され、また土地商品化が進められるなかで国有地払下げの恩恵も受けるなど、日本人地主の進出が容易となった [伊藤ほか, 2000:325]。
- 4) 「産米増殖計画」は、1918年の米騒動で糾弾された日本の食糧問題の解決のために、朝鮮の米穀の増収を図って、朝鮮総督府が、1920年から始めた土地・農業改良事業である。1930年の昭和恐慌以降、この事業は停滞し、1934年に事業は中止された。その結果、産米増収は果たされたが、朝鮮農業の対日移出用の米穀モノカルチャー化が進み、大地主の土地集積が強まった。
- 5) 1931年末に51万人であった在朝日本人は、1942年末に75万人であった [高崎, 2002:159]。
- 6) 加藤完治は、満蒙開拓青少年義勇軍の設立にかかわり、日本人の満蒙開拓移民を推進した。
- 7) 朝鮮半島における朝鮮人の失業者は、1932年から1940年まで、それぞれ393,615人、329,856人、310,043人、253,322人、241,392人、162,543人、131,230人、123,745人、76,174人だった [許, 1993:27]。
- 8) 旧安全農村は、現在はそれぞれ、営口市の営口安全農村、三源浦鎮の三源浦安全農村、鉄嶺市の鉄嶺安全農村、尚志市の河東安全農村、綏化市の綏化安全農村である。
- 9) 歴史学者の加藤陽子が言うように、「満洲事変」には、①相手国の指導者の不在を衝いて起こされた、②本来は政治干渉を禁止されていた軍人によって指導された、③国際法と抵触することを知りつつ、国際法違反であるとの非難を避けるように計画された、④地域概念としての満蒙の意味する内容を膨張させていった、という4つの特徴があった [加藤, 2007:3]。
- 10) 朝鮮族の集住地域には、老人協会があり、強いネットワークを持っている。筆者は、老人協会を通して多くの安全農村体験者を紹介してもらった。
- 11) 朝鮮族の出稼ぎが多くなり、かつてのような、長男が親の面倒をみるという構図は崩れている。近年、朝鮮族の高齢者だけが入る養老院が増えている。
- 12) 中国東北地域には、朝鮮語の新聞がいくつかある。黒龍江省には『黒龍江新聞』、吉林省には『延辺新聞』、遼寧省には『朝鮮文報』がある。
- 13) 誓約書と条項は朝鮮語で書かれており、日本語への翻訳は筆者が行った。

- 14)『洛東江』は、韓国の詩人金容浩さんが1938年に発表した詩である。
- 15)「満洲」に移住すれば徴兵が免除されたという話は、ソ満国境に移住した他の移民体験者からも聞いた。
- 16)朝鮮語でチョソン(조선)は朝鮮、サラム(사람)は人を意味する。チョソンサラム(조선사람)とは朝鮮語で朝鮮人という意味の言葉である。
- 17)当時、朝鮮では「処女供出」という女の子を供出する制度がありました。強制的でしたので、親たちは娘が10数歳になったら結婚させました。周りには幼くして結婚した女の子が多かったです(朴在和さん、1944年渡満)。
- 中国に来たのは生活が困難だった理由もありますが、「処女供出」の徴集が厳しかったこともあります。若い女の子は、無理やりに連れて行かれました。「日本の奴ら」は本当に残酷でした。その徴集を避けるために、父親は私を家からほとんど出さないようにしました。水が無くなって外に水汲みに行く時は、汚いタオルで頭を包んだり、顔に墨を塗ったりして出かけるようにしました(YNさん、1944年渡満)。
- 18)筆者がインタビューを行った安全農村体験者では、慶尚道出身者12名、忠清道出身者が2名、黄海道出身者が1名、咸鏡道出身者が1名であった。筆者は、旧安全農村の老人協会を通してこれらの人びとに会った。
- 19)「保甲制度」は、「戸」を母体として編成され、保甲内の住民に相互を監視させる自治自衛の隣保組織である。台湾の植民地統治において保甲制度を導入した日本は、その経験をふまえ、満洲国において保甲制度を1933年12月より施行した」[遠藤, 2013:37]。
- 20)「満洲」における反満抗日運動の研究はすでに多い。代表的な研究として、和田 [1992]、水野 [2000]、山田 [2001] がある。
- 21)朴敬玉によれば、「河東安全農村の朝鮮人農民もほかの安全農村と同じく、朝鮮から直接移住してきたのではなく、故国を離れた満洲各地に散らばって居住していた人々であった」[朴, 2015:156]。

文献

- 伊藤亜人他監修,2000,『新訂増補 朝鮮を知る事典』平凡社。
- 伊藤一彦,2008,「異民族支配の模索——在満朝鮮人調査」松村高夫・柳沢遊・江田憲治編『満鉄の調査と研究』青木書店, 271-335。
- 遠藤正敬,2013,「満洲国統治における保甲制度の理念と実態——『民族協和』と法治国家という二つの国是をめぐる』『アジア太平洋討究』20, 37-51。
- 河合和男,1986,『朝鮮における産米増殖計画』未来社。
- 梶村秀樹著作集刊行委員会・編集委員会編,1993,『梶村秀樹著作集 第4巻 朝鮮近代の民衆運動』明石書店。
- 加藤陽子,2007,『満洲事変から日中戦争へ』岩波新書。

- 金静美,1992,『中国東北部における抗日朝鮮・中国民衆史序説』現代企画室.
- 金周洛,2006,「満洲地域韓人『安全農村』研究——營口、三源浦地域を中心に」韓国独立運動史研究所編『韓国近現代史研究』38, 108-134.
- 金永哲,2007,「在満朝鮮人の生活実態と『安全農村』」京都大学大学院人間環境学研究所編『人間・環境学』16, 43-58.
- 孫春日,2003,『「満洲国」時期朝鮮人開拓移民研究』延辺大学出版社.
- 高崎宗司,1996,『中国朝鮮族：歴史・生活・文化・民族教育』明石書店.
- 高崎宗司,2002,『植民地朝鮮の日本人』岩波新書.
- 朝鮮總督府農林局編, 1940,『朝鮮農地年報』1.
- 鄭吉泳, 1997,『興和五十年』私家版.
- 鶴嶋雪嶺, 1997,『中国朝鮮族の研究』関西大学出版部.
- 東亜勸業株式会社編,1933,『東亜勸業株式会社十年史』.
- 東亜勸業株式会社編,1934,『河東、營口、鉄嶺、綏化安全農村建設の経過並に現状』.
- 外村大,2011,「日本帝国と朝鮮人の移動：議論と政策」蘭信三編『帝国崩壊とひとの再移動：引揚げ、送還、そして残留』勉誠出版 11-20.
- 並木孝三,1935,「安全農村に関する調査」南満洲鉄道株式会社総務部労働課編『労務時報』63, 75-134.
- 玄恩柱,2003,「農業生産を通してみる安全農村住民の経済状況」南陽洪鐘億博士定年退官記念論叢発行委員会編『東北アジア歴史の諸問題』白山出版社338-354.
- 樋口雄一, 1998,『戦時下朝鮮の農民生活誌1939～1945』社会評論社.
- , 2000,『戦時下朝鮮人労務動員基礎資料集』第2巻, 緑蔭書房.
- 朴敬玉,2015,『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』御茶の水書房.
- 朴仁哲,2018,「朝鮮人『満洲』移民の『安全農村』体験」『理論と動態』10, 78-94.
- 許粹烈, 1993,「日帝下朝鮮の失業率と失業者数推計」経済史学会編『経済史学』17, 1-27.
- 洪鐘億,1997「日帝の在満朝鮮人を統制するための鉄嶺安全農村について」『明知史論』9, 62-108.
- 満鉄資料課,1934,「朝鮮人安全農村に就いて」『満鉄調査月報』40(5), 95-104.
- 満鉄調査部,1939,『満洲農業移民概説』南満洲鉄道株式会社.
- 松村高夫,1972,「満洲国成立以降における移民・労働政策の形成と展開」満洲史研究会編『日本帝国主義下の満洲』御茶の水書房 213-314.
- 水野直樹,1999,「朝鮮人の国外移住と日本帝国」『岩波講座世界歴史19移動と移民——地域を結ぶダイナミズム』岩波書店 255-275.
- 水野直樹,2000,「満洲抗日闘争の転換と金日成」『思想』912, 133-161.
- 水野直樹編,2004,『生活の中の植民地主義』人文書院.
- 矢内原忠雄,1934,『満洲問題』岩波書店.
- 山田豪一,2001,「満洲における反満抗日運動と農業移民」柳沢遊・岡部牧夫編『展望日本歴史20

帝国主義と植民地』東京堂出版 280-329.

山本有造, 2004, 「満洲国——歴史の終わり、そして新たな始まり」藤原書店編集部編『満洲とは何だったのか』藤原書店 67-77.

山室信一, 2004, 『キメラ——満洲国の肖像(増補版)』中公新書.

依田喜家, 1976, 「満洲における朝鮮人移民」満洲移民史研究会編『日本帝国主義下の満洲移民』龍溪書舎, 491-606.

和田春樹, 1992, 『金日成と満洲抗日戦争』平凡社.

尹明淑, 2003, 『日本の軍隊慰安所制度と朝鮮人軍隊慰安婦』明石書店.

李勲求著, 拓務大臣官房文書課訳編, 1933, 『満洲と朝鮮人』.

(ぼく・じんてつ 社会理論・動態研究所)